

2022年7月1日

大阪大学

西田幸二

夢洲における国際医療のあり方への意見

● 構想全体に関して

夢洲における国際医療のあり方の検討も重要だが、大阪の未来のまちづくり構想全体の中で、万博後がどのような位置づけであるか示すことが重要である。そのため、この夢洲における国際医療のあり方の議論は、万博後の大阪まちづくりについての議論と連動させていくべきである。

この構想は、コロナ前のインバウンドの伸長も踏まえ、コロナ後に外国人観光客が戻ってくるだろうという認識で練られているように思う。しかし、コロナ禍では生活様式自体が大きく変化したため、インバウンド向けのサービスが成功する見込みがどの程度か何らかの調査を行い、エビデンスに基づいて判断すべきと思う。

通訳等の問題については、デバイスの発展が著しいことから、AIなどの新たな技術・仕組みを用いた施設など「人材育成」以外についても検討すべきである。

● 夢洲における医療サービスの対象の考え方

医療目的の訪日旅行者・短期滞在者・在留外国人それぞれに対する医療をどう考えるかという問題である。

夢洲でしか受けられない医療があるといった魅力がないと、人は集まってこないと思われる。

少し考え方を变えて、高度なテクノロジーを用いて自分の健康状態を理解する人間ドックのようなものであれば、IRに来るような方々からのニーズがあるのではないか。

患者の帰国後のフォローアップとしてAIなどの高度技術を用いた遠隔医療と自国ドクターによるケアの融合的手法が考えられる。

● 外国人医師・看護師の参画

仮に、短期滞在者(主にビジネス目的)をメインターゲットとするのであれば、夢洲に医療機関を設ける必要はなく、医療コーディネーターだけで十分である。

全国から在留外国人が集まるような座組を見通すのならば医療者を置くべきだ。今後の日本にとって重要となる外国人労働者にとっては、同国人の医師の診療を受けられる病院は安心感があると思うので、そうした医療機関の存在は大

きい。日本の最先端医療が外国人医師たちによって提供されることにはニーズがあると思う。「大阪のあそこに行けば安心だ」と、外国人が思うような医療機関が夢洲にあれば、日本中から外国人患者が集まるような場所になるだろう。

- **その他**

これからの医療におけるキーワードはウェルビーイングである。ウェルビーイングを高水準にするためには、医療の質の他に、医療を受ける環境などの+αが必要である。テクノロジーを集積させることにより提供可能な利便性もあり、万博のレガシーとして、人間のウェルビーイングを実現する地域や空間を提供するという方向性はあるのではないかと考える。

万博には様々な専門性をもつ方が夢洲に集まるので、医療関係者だけではなく知見をレガシーとして残すべきであると考えている。

以上